

明治41年に創刊され、昭和30年まで続いた とも長期にわたる少女雑誌で、黄金期の昭和10雑誌「少女の友」(実業之日本社)の創刊100年代前半を中心の編集はカラフルな豪華本となる周年記念号が発行された。日本出版史上もつり、「少女」たちの雰囲気を与えている。

明治41年創刊「少女の友」、100周年記念号を発行

昭和10年代に内山基という名編集者が読者との交流をはかり敬慕されていたという。挿し絵を描いていた中原淳一を表紙へ抜擢する。あのでっかい目の美少女は昭和10年1月号の「新春」から登場している。

私たちの夢を大きく支えていたのは、あのなよなよした、たよりない女の子ばかり描いてみせる中原淳一のさし絵だった(須賀敦子)

中原さんの描く少女の目にはいたわりがあった。これは、女の子にとつてすごく大切なものを教えてくれた気がする(田辺聖子)

その淳一描く表紙絵66点がどさつと紹介されている。年に1枚はページ大である。そして15年の6月が最後となり、当局の圧力により、退場を余儀なくされたという。

どんな人だったのか。フアッションデザイナーの芦田淳は、パーマネットをかけていた、バッグを使っていた、セーターにまでバッグを入れていた「理由を本人に質問したという。でも、それがいまでは普通のことになった。時代に先駆けていた、と書いている。

☆もしこの世の中に「悪いやり」がなかったら、淋しくて、とても生きてはいられない。

☆もしこの世の中に「詩」がなかったなら、人は美しい言葉も知らないままで死んでゆく。見学者の心にズシンと迫るような淳一の言葉、箴言?が途中中に貼り出されている。

美しく生きることに生涯をかけた中原淳一、着飾った女性客ばかりの中で、一時代をかくしてきた人を偲んできた。

よみがえる中原淳一



A5判並製函入り376ページの100周年記念号。3990円。なお、中原淳一・昭和の付録お宝セット(1万4700円)が発行されるそう。左は松屋銀座店の中原淳一展のカタログ

美しく生きる

中原淳一展

愛する心

という松屋創業140周年記念展が3月、銀座で開かれた。大きな瞳、洗練されたスタイル画など美意識の結晶が淳一画だったという。その原画など500点が展示された。

☆もしこの世の中に、風にゆれる『花』がなかったら、人の心はもつともつと、荒んでいたかもしれない。

美しく生きた中原淳一展

